

(VIII)

目のフチだけが、バシバシと緊張した存在の目覚めた時間一午前二時三十分、忘れられていた高さ一間、幅半間の立体、それは真っ青に輝くデシンに包まれている。長・馬場・桜井のトリオの開幕なのだ。開幕の序章に反外面宣言と刷った号外が全員に配られた。外側に、両方から零の連続数字を囲んで「アナタだけは来て下さると思ったわ」「穴に埋めた卵を食べて下さい。食べ終わった時、ワタシがいます」と書いてあった。テープレコーダーからは秒針の刻音が拡大されて流れ出て来る。静かにデシンの青い布がはがれた。ちょうど美神の衣をハギ取るように……。姿を現わしたエンパイヤビルのような立体の窓には、一杯卵がつめられ、黒色のビルに白い卵という黒白の鮮明さは性別不明の無気味さで、卵をして人間に君臨させ、形而上の質問を投げかけて来た。皆は一行に行儀よくなり、順々に卵をとっては食べ、食べながら青布で区切られた桜井との対面器で、赤布でおおわれたアイラシイ桜井との微笑に人生の深い深い意味を感じとり、満足した夜の意味が充満した。

すべての卵(二百十五個)が食べられた時、中の電気がついた。その中に長はいた。いつもの長が、いつものままの姿で、なんの扮装もなく、日常のまま、それも黙って「それこそ、たったそれだけのこと」だった。

なんという気味無さだろうか。それが三十分ですべて完了なのだ。しかし日数がたつに従って長がやった事件は次に拡大してくる。そういえば、あのビルジングの作品は、一九六〇年の九州派のグループ展に、二個が一對となって出品されていたものの一つだ。オチがサトウ画廊(五、六年前)でオブジェの個展をやった前後、相当議論したが、それまで長は実存主義一点張りだったのを内容から形式へと徐々に発展させ、あのような形にまで追いつめたのだ。無数に彫られた、四角の立方体の窓こそが、長のネライだったのだろうことは出来たが、この大集会の会場で、その孔に純白の有機物たる卵が詰め込められた景色或は勿論現実には夥しい無精卵が幾何学的に並んだ。

そんな時、立方体の孔は性別不明の「誕生」に祝福され「性別不明の輝かしい歴史の窓」そして、これのみが、やっとなら男女との絆を見事に切断してくれる形而上的の刀であろうか。それはちょうど明日は信じてても信じなくてもまた明日という観念とは別個に、地球が太陽の周囲を廻転する事実の時間、明日がやってくるように、熱狂をなくしたロマンが名士面して田舎道を歩いている夕暮れ、確かにそこにしか存在し得ない刀であるのだ。